「絵はがきの語る歴史」

宮崎県地域史研究会
武田　信也

目次

はじめに―一枚の絵はがきが語るもの

皇太子（大正天皇）行啓と絵はがき
　1　当時の絵はがきをめぐる環境
　2　行啓紀念（記念）絵はがき発行の経緯

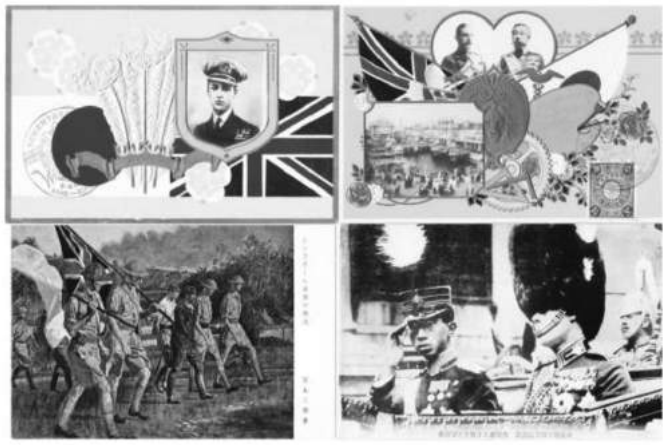
地元発行絵はがきの一事例
　1　宮崎線開通のインパクト
　2　個人での絵はがき発行事例
　3　大正九年皇太子（昭和天皇）行啓

絵はがきに見る観光エリア
　1　一次交通から二次交通へ―別府の先行事例
　2　二次交通による名所旧跡の選択―宮崎における遊覧バス
　3　風景（名所）絵はがきのパック化の実例

おわりに

はじめに―一枚の絵はがきが語るもの

ここに一枚の絵はがきがある。以前、この絵はがきを祖母に見せた際、祖母は日露戦争の一場面を描いた絵画(1)であると分かると「リョジュンカイジョウヤクナリテ、テキノショウグンステッセル、ノギタイショウトカイケンノ、トコロハイズコ、スイシエイ」と歌い始めた。「コン歌を知っちょいナ?」と訊かれたが、筆者は何という歌かは分からなかった。後日調べると、「旅順開城約成りて、敵の将軍ステッセル、乃木大将と会見の、所はいずこ、水師営」の歌詞は、文部省唱歌「水師営の会見」にあった(2)。日露戦争における旅順要塞陥落後、日本の乃木将軍とロシアのステッセル将軍の会見を歌ったもので、絵画に描かれた場面でもある。



絵はがきに見る近代日英関係の変遷

「日露役旅順開城」

一枚の絵はがきによって、記憶の引き出しを開けた祖母が思い出したのは、子供時代の唱歌であった。

絵はがきは、個人の小さな歴史だけでなく、大きな歴史を語ることもある。例えば、近代日英関係の移り変わりを示す、次の四枚(右上から日英博覧会・東宮殿下御渡欧記念・英国皇太子殿下御来遊・シンガポール英軍の降伏)を年代順に並べると、桂太郎内閣の外務大臣、小村壽太郎が結んだ、明治三十五(一九〇二)年の日英同盟からわずか四十年で、日本とイギリスは交戦国となってしまったことがわかる(3)。

このように並べ替えが可能なのは、絵はがきの背景である製作年代や作成経緯が正確に分かるということが前提である。この画像資料活用のための前提は、三十五年前、NHKの荻昌朗氏と国立民族学博物館の梅棹忠夫館長による、映像資料についての対談の中でも言及されており、

荻　わたしどもライブラリアンの立場でかんがえると、映像そのものがあっても、これがいつ、どこで、何を写したかという文字の記録をともなっていないと、映像の価値がでてこないんですね。自分が撮った映像ならばわかっていても、ほかの人はその映像を見ただけではつかえないし、だいいち、さがしだせない。そのへんを解決しなければいけないとおもっています。

言語情報をともなわない映像情報は価値がひくい。言語情報と映像情報は両方がくっついていなけりゃだめなんです。動的映像情報だけでなく静的映像情報―写真についても克明なデータがなけりゃだめだということですね。写真だけで、ことばはいらないというのは、うそです。

梅棹

と述べている(4)。絵はがき(画像資料)の書誌情報や収蔵品情

報が空白という状態は、『博物館の世界』で言うところの「言語情報をともなわない映像情報は価値がひくい」状態であり、保存機関としては不十分なことだと実感させられる。

絵はがきの整理分類に先行したのは、博物館などに所属しない収集家であった。島田健造氏の『日本記念絵葉書総図鑑』では、逓信省発行絵はがきをはじめとして、当時の日本国内、海外植民地等発行の絵はがきについて、作成背景を詳しく調査している(5)。

二十年以上前に、佐藤健二氏が絵はがきについて「書誌学も古文書学もほとんど周辺に追いやってきた」(6)と指摘した頃、史(資)料保存の現場に入った人間の経験では、絵はがきを保存はしていても、どのように活用すればよいか分からないのが実情であった。筆者がかつて勤務した大分県公文書館では、大分県に関する地域資料として絵はがきを受け入れていたが、在職四年間で広報誌に一度掲載したくらいで、企画展などにも出さなかった。同じ建物の先哲史料館が展示に出す、大友宗麟の書状などには、とても公文書館の資料は太刀打ちできないと考えていたからである。ただ、十年二十年先の将来は何が貴重になるかわからないということで、担当職員と検討しながら、明治時代の写真帖や初三郎の鳥瞰図などと共に、なるべく絵はがきも公文書館へ受け入れていた。

現在は、絵はがきの画面だけを眺める段階を過ぎ、整理を行った絵はがきをメインにして、展覧や展示を行える段階に来ている。生田誠氏は、百種類の絵はがきについて分類を行い、カタログを作成したが、ジャンルによっては特定困難な作成時期についても調査特定している(7)。学習院大学史料館では、大正時代の通史を描く展示資料として活用され(8)、和歌山大学紀州経済史文化史研究所の展示では、作成の主体、作成の背景、製造の方法など絵はがき画面の裏側にも着目している(9)。國學院大學の絵はがき資料目録の成果もあるが(10)、各機関の事例は、地道な整理の結果であり、今後絵はがきの受け入れ、整理、展示などへの活用を行う際参考になるものである。

宮崎県内では、絵はがきについて『宮崎県史』に民俗分野での言及がある。「様々な映像資料は、対象物とともに時代や暮らしの姿を映し出す、得がたい民俗表現の記録である。それらを通して、当時の社会環境や風俗・流行などを多角的に窺い知ることができる」と前置きし、静止映像の素材や映像表現の一つとして絵はがきを挙げる(11)。絵はがきは民俗の対象分野と説明されていたが、具体的な分析や考察はなかった。

『宮崎県史』以後、絵はがきのような文書以外の紙資料について、倉真一氏、長谷川司氏の研究がある(12)。倉氏、長谷川氏の研究は、サンプルをある程度集積した上で分析した研究であり、戦前における青島絵はがきの変遷や、今回関わるものとしては遊覧バスのパンフレット分析を行っている。

歴史分野が絵はがきを分析の対象としてこなかったのは、例えばいつ作られたかがはっきりしないなど、「いつ、どこで、だれが、なにを」を確定する、史料批判に耐えられない性格を元来持っているからである。画面さえ見えれば、戦前と戦後すら関係ないというのは、趣味ならともかく研究では通らない。絵はがきという「映像情報」を生かすために、年代や作成背景といった「言語情報」を可能な限り見つけるのである。例えばケネス・ルオフ氏は、戦前の日本における観光とナショナリズムの研究に、絵はがきなど画像資料を活用し、宮崎における聖蹟観光ついても考察を行っている(13)。

現在は、通信面が明治四十(一九〇七)年に三分の一、大正七(一九一八)年に二分の一に拡大され、昭和八(一九三三)年に「郵便はかき」から「郵便はがき」表記へ変わることが、絵はがき作成年代を判定する目安となることも広く知られている(14)。『宮崎県史』で示された対象分野を、今回は歴史の側が踏み超える形になる

が、一連の具体的な分析や考察を経た以後には、絵はがきを含めた画像資料は、歴史学の対象分野でもあるとしたい。

皇太子（大正天皇）行啓と絵はがき

1　当時の絵はがきをめぐる環境

明治三十七（一九〇四）年に始まった日露戦争も後半に入ると、戦意高揚や軍事郵便のため、逓信省は記念絵はがきを発行した(15)。

国民の士気を高めるために、逓信省は戦役記念の絵葉書を発行した。三十七年九月、第一回の六枚を発行したのに始まり、戦争が終わった三十八年十月の第四回（三枚一組のものを五組）に及ぶ。これが、ものすごい人気を呼んだ。遼陽（リャオヤン）の会戦、旅順の陥落、奉天（瀋陽）の会戦と、戦局が進むにつれて、記念絵葉書の人気は上昇する一方であった。

『日露戦役紀念絵葉書』

国内における逓信省発行絵はがきブームは、生方敏郎も書いているが遼陽、沙河戦勝の頃から「とにかくこの三枚一組戦捷記念絵葉書の景気は素晴らしいもので、郵便局へ早く買いに行かないと、じきに売り切れてしまう。」(16)というものであった。『日本記念絵葉書総図鑑』(17)によると、日露戦争に関する逓信省絵はがきの発行数は第一回（四十一万五千組）第二回（六十万組）第三回（五セット各十三万四千組）第四回（五セット各十四万組）、第五回（一セット十万組）となっている(18)。戦争が終わっても絵はがきの人気は衰えない。

こえて三十九年四月、凱旋観兵式が行われた。このときは絵葉書のほかに記念切手も発行され、特殊通信日附印が使用された。つづいて五月六日には、さらに戦勝を祝う絵葉書が発行される。ブームは頂点に達した(19)。

樋畑雪湖（正太郎）も絵葉書趣味高潮時代の光景として「第五回戦役紀念葉書の出た頃が最も高潮に達した時代で明治四十年即ち西暦千九百七年前後が單に日本といはず、歐羅巴に於ても最も盛んであつたのである。」(20)と回顧している。

絵はがき販売新聞広告

この頃の新聞広告に、絵はがき販売広告がある。ミスマン商会は大阪から地方紙に広告を出していて、最新の絵はがきとして「懸賞當選拾美人」「コミツク」「コロタイプ販景色及美人花鳥」などの商品を取り扱っていた(21)。これらの記録からは、絵はがきを取り巻く当時の世相が見えてくる。

2　行啓紀念（記念）絵はがき発行の経緯

明治四十年、皇太子（大正天皇）は朝鮮半島から南九州と四国各県を巡回する形で行啓を行い、宮崎県もその対象県となった。

皇太子行啓に際して、宮崎県は絵はがきを発行している。これについては『宮崎縣行啓誌』に、当時の記録が残されている(22)。

縣費金四百八十圓ヲ投シテ繪葉書八千組ヲ發行シ行啓記念トシテ先ツ　殿下ニ獻上シ次ニ供奉員一行、御召艦竝ニ護衛艦隊乗組員、行啓關係職員、郡長、議員、町村長、拝謁者、奉拝者、新聞記者及來縣セル主ナル公私人等ニ配布シ別ニ私人ヲシテ發賣セシメタルニ五十組御買上ノ恩命ヲ拜セリ繪葉書ノ意匠ハ逓信屬樋畑正太郎ノ考案ニ成ル一葉ハ上半部ニ皇太子旗ヲ顕シ其御紋章中ニ　殿下ノ御肖像ヲ奉掲シ下半部ニ御旅館タル紫明館及御召艦香取ノ寫眞ヲ配シテ地ヲ黄色トシ皇式御調度ノ古式ヲ模シテ竹及桐ノ浮出模様ヲ描ケリ他ノ一葉ハ白色浮出ノ月桂樹ノ額縁ノ中ニ官幣大社宮崎宮ノ寫眞ヲ掲ケ地紋ハ朝廷大儀ノ時ニ用ヒサセラル、近衛次將ノ矛ニ附シタル飛札ノ模様ヲ紫色ニテ描キ出セリ〔以下略〕

「行啓記念絵葉書」

樋畑正太郎（雪湖）は、明治三十三（一九〇〇）年の私製絵はがき制度以来、二十有余年間逓信省にあって、「絵葉書図按主任」として奉職していた人物である。その絵はがき図案の製作姿勢は「皇室の大典・國家の重なる出來事を根據ある寫眞若は畫圖によりて之を後世に傳ふべき史的紀念繪葉書を忠實に其作製に從事」したと自ら述べており、デザインを依頼した県の意気込みが感じられる(23)。

樋畑のデザインでは、皇太子旗と肖像を組み合わせて配置し、皇太子の正服とされた「黄丹衣」(24)の色である黄赤系の色を地色に使用し、儀仗用の矛から意匠を取るなど、皇室の意匠や朝廷の故実に基づいてデザインが行われている。皇太子旗は朱赤系の色に金で内枠と菊花紋を描くので、はがきは上半分朱赤色、下半分黄赤色という派手なものになった。

平成二十六（二〇一四）年、県立図書館「宮崎の新聞」展では、行啓に際して宮崎の地元新聞『日州』が掲載した、皇太子肖像を展示紹介しているが、原武史氏の研究(25)で明らかになったように、全国でも早い皇族肖像の新聞掲載事例であった。これは紀念(記念)絵はがき発行についても全く同様であり、九州の宮崎県、大分県は、原氏が事例を紹介した東北各県の行啓記念絵はがき(26)よりも先行して、皇太子肖像を使用したことが歴史的にも評価できるのである。

『大分県行啓記念絵葉書』

同時期に県が製作した写真帖（『宮崎縣寫眞帖』）があるので、絵はがきはデザインに凝ったものに作られた。大分県製作のものにも言えることだが(27)、デザイン化の傾向は、数年前に大ブームとなった日露戦役紀念絵はがきの影響も考えられる。一連の戦役紀念はがきは、デザイン化された画面に写真を取り込んで構成されており、「紀念（記念）絵はがき」の模範を逓信省が示しているのである。しかもこれが全国に流通したことは、大量の発行枚数が示している。

同時期、『宮崎宮竣工奉告大祭紀念繪葉書』など県以外の発行に係る紀念（記念）絵はがきも、デザイン化されたものが想像できる。

『宮崎縣寫眞帖』は現在も多くの公立図書館に所蔵されている。写真帖が広く一般の目にふれることで、どこの風景をどのように写すかについて、写真帖の撮り方やアングルは影響を与える。これは、写真帖以後に我が町・我が村の風景（名所）絵はがきを製作する際には特に示唆を与え、参考となるだろう。

『宮崎線案内』

地元発行絵はがきの一事例

1　宮崎線開通のインパクト

鉄道開通以前、明治四十年に宮崎宮造営奉告祭記念として県内で作られた『宮崎縣案内記』(28)などはあったが、鉄道関係機関における宮崎の紹介はほとんどなかった。例えば明治四十三（一九一〇）年の『鐵道院線沿道遊覧地案内』を見ると、廻遊旅行の栞では、予定日数十日の九州縦断で「更に熊本より南し、八代より人吉まで、車窓球磨川の奇勝を眺め、鹿児島に入りて大西郷の故郷を見る」と熊本以南では現在の肥薩線、日豊線（隼人・鹿児島間）沿線のコースが提案されたにすぎない(29)。

大正五（一九一六）年の鉄道開通によって、宮崎は中央とつながったが、九州鉄道管理局は『宮崎線案内』(30)を発行し、宮崎線沿線（現在の吉都線・日豊線都城宮崎間）名所を案内している。この案内は、国有鉄道当局の印刷物に宮崎県内が紹介されたものである。

表『宮崎線案内』に紹介された各駅の名所旧跡等

駅名	紹介された名所旧跡等	備考
京町駅	吉田温泉	
加久藤駅	加久藤、加久藤城址、白鳥温泉	
飯野駅	龜城の址、狗留孫神社	
小林町駅	小林町、伊東塚、霧島峯神社	
高原駅	狭野神社、霧島山、霧島登山道	
谷頭駅	母智丘神社	
都城駅	都城町、官公衙其他、主なる旅館	
青井嶽駅	青井嶽隧道	
清武駅	安井息軒誕生地	
大淀駅	伊萬福寺、生目神社、青島、内海港、鵜戸神宮	宮崎軽便鉄道沿線含む
宮崎駅	官公衙其他、主なる旅館、小戸神社、安楽寺、天神山、宮崎神宮、景清廟、一葉の浜、住吉の浜、都萬神社、西都原	県営軽便鉄道沿線含む

※高崎新田、三股、山之口、田野駅は記載なし。

現在のえびの市から宮崎市方面に向けて案内が進んでゆくが、京町、加久藤、飯野、小林町各駅は、中世伊東島津両氏に関係する名所旧跡を紹介している。高原駅は、霧島に近い登山口であることをアピールする。西諸県郡の地域に比べると、都城駅など北諸県郡の地域は資料を提供しなかったのか、町の説明だけで名所の記載がほ

とんどなく、駅名しかないところもある。大淀駅と宮崎駅の項目では、接続する軽便鉄道沿線を含めて紹介しているので、青島や西都原古墳群までがエリアに入る。この大正五年十月から十一月頃は、地元でも官民それぞれで、鉄道開通を契機に作成されたガイドブックが現れる。宮崎県は『宮崎縣案内』を刊行した(31)。『宮崎名所』は県内全域の名所案内記で、多くの図版を添え、県庁や官公署、市街地、西都原、高千穂なども紹介する(32)。当時宮崎まで伸びた鉄道は「九州文明の東漸は、愈急行列車的速度を以て、ボギー車の鐵路を走る響きと共に、朝な夕なに輸り込んで來る」という印象で迎えられ、「すべての活動に新しい生氣を帯び、何か知らず潑溂と躍つて居るのが見える。」(33)という活気をもたらしていた。

泉亭絵はがき

2　個人での絵はがき発行事例

先の明治四十年行啓の際、新聞広告に「大祭會紀念日向名所繪葉書各種卸小賣」とあって(34)、当時の宮崎における風景（名所）はがきの作成販売が分かる。官製の絵はがき以外にもいくつかの私製絵はがきが作成販売されていた傍証である。

大正時代の宮崎県内おける、個人での絵はがき発行が行われた事例を取り上げてみたい。泉亭は、紫明館と並んで宮崎における有力料亭であった。裏面を見ると通信欄スペースが三分の一あるので、大正七年以前の作成とわかる。

明治二十三（一八九〇）年の『日隅薩商工便覧』には、「集會席　宮崎松山町泉亭　緒方冨三郎」(35)とあり、大淀川河畔の料亭として、大小の帆船や遊覧船が往来する様子と共に絵入りで紹介される。また『宮崎名所』では、宮崎町の案内の中で(36)、「若し夫れ一陶の醉を買はんとならば、松山町の「泉亭」か「紫明館」、乃至又た下太田の「水光館」か、」とある。発行元の植村写真館は、館の建物写真が大正四（一九一五）年の『宮崎縣大觀』にも収められるが(37)、この『大觀』で写真主任を務めた植村不散が経営していた(38)。

当時絵はがきは、写真館が主に発行していた。先に『宮崎名所』を発行した三島信太郎も、商工案内では「寫眞繪ハガキ　橘通三丁目　三島信太郎」と紹介され、写真と絵はがきを扱っていたことがわかる(39)。絵はがきは「三島天眞舘」として宮崎神宮、青島など日向名所を発行していた(40)。

作られた泉亭の絵はがきを見ると、床の間や、掛け軸、調度品など座敷内部はほとんど写らない。「大淀川ヨリ望ム」とキャプションを付け、川面（船目線）からの料亭外観を写すなど、借景としての大淀川沿いの立地をアピールしたりもする(41)。同じく大淀河畔にある

大淀川鉄橋（『宮崎縣写真帖』）

泉亭と大淀川鉄橋

『小林名所軍馬ノ櫻繪はかき』

神田橋旅館も、「大淀河畔に面し」「四季風光絶佳」と広告し、大淀河畔の風景を紹介している(42)。大正五年の『宮崎縣寫眞帖』(43)にも、鉄橋が景勝地の一つとして撮影されるが、「鉄道の景観」が絵になるという当時の意識が見える。鉄橋と汽車が映り込む泉亭の絵はがきは、「大廣間ヨリ鐵橋ヲ望ム」とキャプションがつけられており、大淀川と同様に「鉄道の景観」を積極的に借景として取り込んだ結果である。

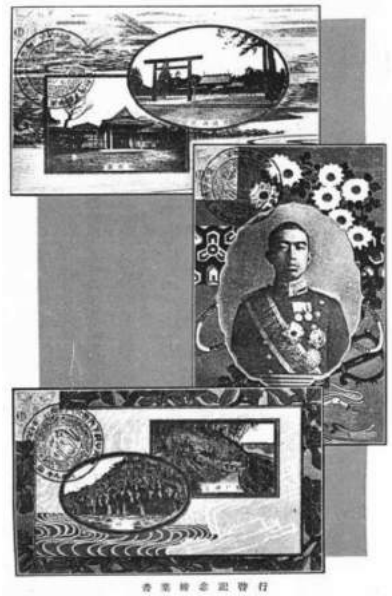
絵はがきは宮崎町内だけでなく、県内各地の写真館や書店が発行元になる。都城町では上町海江田書店が、町外の五十市村に当時駐屯していた歩兵第六十四連隊正門を絵はがきとし(44)、小林町の例では、陸軍軍馬補充部の桜並木を写したものが、町内の土橋写真館や格〔柊〕山写真館からそれぞれ発行されている(45)。

3　大正九年皇太子（昭和天皇）行啓

大正九（一九二〇）年に皇太子（昭和天皇）の行啓が行われた。この時にも絵はがき製作の記録が残されている(46)。

東宮行啓紀念繪葉書ヲ東京株式會社警眼社ニ命シテ謹製セシメ殿下ニ獻上シ尚賓客竝行啓關係者等ニ頒贈シタリ三枚一組トシ包紙ハ神社屋根ノ側面ニ杉林ヲ配シ下方ニ黄心樹（オガタマノ樹）ノ實ヲ描出ス葉書一葉ハ八咫鏡ノ中ニ　殿下ノ御肖像ヲ謹寫シ白菊一枝、縣徽章、劒璽ヲ周圍ニ配シタリ一葉ハ宮崎神宮ト御旅館御玄關トヲ収メ霧島山と大淀川トヲ上下ニ配合シ一枚ニハ周圍ニ黄心樹ノ果實ヲ描キ鵜戸神宮御窟屋、青島、蒲葵林ヲ駢べ繞ラスニ岩壁ト潮流トヲ以テシタリ何レモ高雅鮮麗ノ製作ナリ

宮崎縣寫眞帖ハ縣内著名ノ神社市街地港灣其他景勝ノ地ヲ撮影セルモノニシテ登載寫眞数五十一枚裏面ニ簡単ナル説明ヲ附セリ



「行啓紀念絵葉書」

県は、絵はがきと同時に写真帖を作成しており、官公署製作の紀念（記念）絵はがきの、印刷物としての立ち位置がわかる。県が製作する写真帖とは役割分担があり、風景絵はがきを作成したところで「縣内著名ノ神社市街地港灣其他景勝ノ地」を写した写真帖と重複する。紀念（記念）絵はがきは、写真帖のように全面風景写真のみで構成するのではなく、県章をあしらうなどデザイン重視で作られる。明治四十年の絵はがきに比べると、宮崎県の風景（霧島山と大淀川）が背景に描かれ、鵜戸神宮や青島の枇榔樹の写真が取り込まれるなど、より県の個性を出したものになっている(47)。

絵はがきに見る観光エリア

1　一次交通から二次交通へ―別府の先行事例

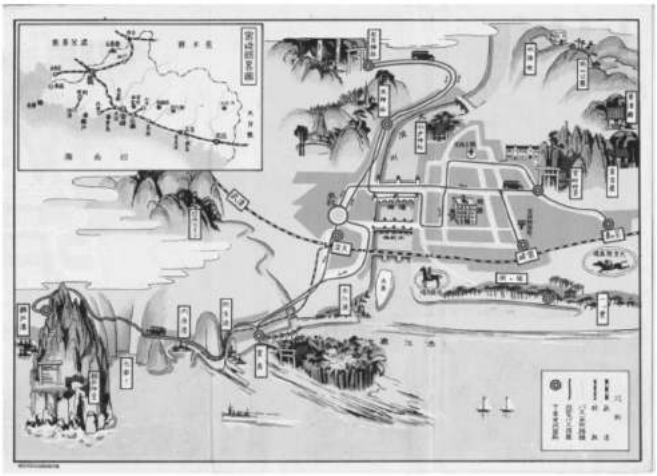
大正十三（一九二四）年に作られた『鐵道旅行案内』で「別府の温泉か、温泉の別府か」(48)と紹介される別府は、田山花袋の『温泉めぐり』(49)でも評価が高い。別府の場合「此間鐵道は亀川、別府、濱脇の三駅を置く、温泉巡り地獄巡りには別府亀川から乗合又は貸切自動車があり、乗合一人貳圓八十銭、約二時間半、歩いても八九時間で充分である」と『鐵道旅行案内』に見え(50)、鉄道や船（一次交通）の整備が進むと、到着地から先のバス・タクシーなど市内交通（二次交通）の整備も進むようになることがわかる。

昭和四（一九二九）年の『名所案内』には「殊に別府からは亀の井の大型遊覧自動車が二十五分毎に出て、運轉中附近の名所について詳しく面白く説明してくれる」と名所を結ぶ形で遊覧バスが走る様子が見え、別府は遊覧バスの先駆けとなっていた(51)。別府では、この遊覧バスに関する絵はがきも作成されている(52)。

2　二次交通による名所旧跡の選択―宮崎における遊覧バス

宮崎では、宮崎バス株式会社（宮崎交通の前身）社長岩切章太郎により、昭和六（一九三一）年遊覧バス事業が立ち上がった(53)。

『宮崎名勝遊覧バス案内』(54)は、倉氏、長谷川氏の分類では二番目に作られたパンフにあたる。この昭和八（一九三三）年に宮崎バスが作成した、遊覧バスのパンフを読んでみると、下車案内箇所は「花ケ島、宮崎、大淀」各駅と「宮崎神宮、一ッ葉、生目神社、天神山、青島、鵜戸神宮」となっており、青島と鵜戸神宮以外は自社のバス路線上の名所が選択されている。また県庁や橘通などの市街地、学校、橘橋も通過するルートになっている。これを十八人乗り、二十五人乗りバスで四時間半（鵜戸神宮を含めて七時間）かけて運行したのである。



『宮崎名勝遊覧案内』

当時は、名所の一部は生目村、青島村、鵜戸村であり、宮崎市とは別である。バス会社は路線上の名所をつなぐことで、行政区域とは異なる宮崎周辺の観光エリアを形成しつつあった。

ここで時間を遡り、遊覧バスに至るまでの名所旧跡について振り返ることにする。明治四十年の『宮崎縣案内記』には、宮崎町近辺では景清廟所、ほかに、宮崎城址を始めとする中世城郭址、権藤種盛父子の墓、古戦場跡、井上眞改出生地（江戸前期の刀鍛冶）など中世近世の名所旧跡や双石嶽、田野化石渓のような自然景観が紹介される(55)。歴史や古文献にも詳しい若山甲蔵が編集した案内記は、狭い町域だけではなく、行政区域を超えて地域の名所旧跡を眺める視点があった。

大正時代に入ると、『宮崎縣大觀』には、名所として城址などの紹介はあまり見られないが、「日向國史攬要」として治乱興亡の歴史が解説されている(56)。一方三島天眞館の発行した『宮崎名所』は、『宮崎縣案内記』の流れを受け継ぎ、宮崎神宮、高千穂の宮址、大淀川、橘橋、青島などに加えて、宮崎城址と種盛の墓、城ケ崎町、八手濱（飫肥藩の望遠場）、眞改の出生地、田野の化石谷などを紹介している(57)。

昭和二（一九二七）年、県による史蹟調査が行われ、調査報告がまとめられている。この内宮崎市郡の調査報告には宮崎城址、下北代官所などが挙げられているが、宮崎城址は「大字池内上北方の両地に跨れる丘陵の一部を劃せる一大城址なり」(58)とあるように郊外の山城で、元和の廃城以後の記録もなく、また下北代官所は「舊延岡領たる宮崎地方二萬石の支配所なり、大字下北方なる高臺の中央南部にあり、現今原田種雄の所有地に屬し其住宅の外全部畑となる」(59)という状況であり、中世近世の史跡の多くは保存整備された名所旧跡にならなかった。この史蹟調査の数年後、宮崎における遊覧バスが誕生するが、生みの親である、宮崎バス社長岩切章太郎の証言を見ることにしたい。

遊覧バスに乗れば宮崎の名所旧跡は勿論ですが、その他、産業、文化、すべてのことが一通りわかるような原稿にしてみたらどうだろう、言葉をかえていえば、宮崎のダイジェストといったふうの案内文にしたらと考えて原稿を書くことにしました。歴史の方は日高重孝先生がおられましたから、日高重孝先生の所に飛び込んで、何かいい材料はないかといろいろ教えてもらいました。それから県庁やら農事試験場などを回りまして何か日本一というものはないかときいて回りましたら、案外日本一が沢山あるんですね。これはしめたと思って、その日本一という奴をみんな拾い上げて案内文の中に入れました(60)。

〔中略〕宮崎が新しく観光界に乗り出す以上は、宮崎の特徴はこれだというようなものを打ち出さなければならないと一生懸命考えまして、三千年の建国の歴史と南国の情緒で行こうと考えました(61)。

遊覧バスの案内箇所は、専門家への相談と検討の結果、「三千年の建国の歴史と南国の情緒」を宮崎の特徴として選択したものであったが、遊覧バス開始以前に遡ってみると、中世や近世の時代についての資料が、明治時代や大正時代に全く無かったわけではない。中世や近世の名所旧跡の大半が、選択されなかったために文化遺産として価値が低いということではないが、宮崎神宮や青島など、ある程度維持整備された名所に比べて、「史蹟調査報告」に見えるように、ほとんどそのままの状態であった。また県作成の写真帖にも、名所旧跡として写真が掲載されたことは無かった。

岩切は、県外団体観光客の「各地を見て廻るので、眼が肥えていて直ぐ他所と比較すると云う事である。それで他所に無いもの、又は他所よりも勝れたものでないと感心してくれない」という傾向特徴を研究しており(62)、的を絞って「三千年の建国の歴史」である古代、産業・文化といった近代、「南国の情緒」を遊覧ルートに選択したのである。

『日向青島の勝景』

3　風景（名所）絵はがきのパック化の実例

これまでは、大正から昭和にかけての宮崎において、風景（名所）絵はがきが作られる土台を見てきた。

風景（名所）絵はがきには、一ヶ所を扱うスポットか、複数個所を含むパックかという二つの流れがある。この内大正から昭和頃のスポット絵はがきとしては、

宮崎神宮、徴古館、生目神社、青島などがある(63)。先の遊覧バスのパンフに掲載される場所には、八枚一組、十枚一組といったある程度の風物の枚数を確保できれば、スポットの絵はがきが作られる。パック絵はがきとしては、先に泉亭のはがきを製作した植村写真館の例がある(64)。

植村（不散）さんの繪ハガキ「新撰宮崎十勝」が出來ました
獨立軒特製の銘打つてゐますがホントに鮮かなものです
宮崎神宮鵜戸神宮生目神社青島全景青島のビロー樹橘橋霧島
靈峰一ッ葉天神山植物園公會堂と圖書館です。

『都城市及附近風光八景』

大正十五年三月の記事に載った『新撰宮崎十勝』は、写真館の製作するものであるから、ある程度絵になる風景を選択した結果の宮崎十勝が並んでいる。宮崎で遊覧バスが始まる前に作られたものだが、霧島を除いて、ほぼ後の遊覧バスルート上にあることも興味深い。宮崎では大正五年以後、大正九年、昭和五年に県の写真帖が作られるが、宮崎十勝の風景は撮影場所として選ばれている。同時代人の目で、ある程度整備された名所を選ぶと、宮崎十勝のような形に収まるのだろう。これを見ると、人々の中に定番の風景という共通認識が出来あがってきており、中世、近世の名所旧跡がほとんど遊覧ルートに選ばれないのも、定番の風景と一般には認識されていないからという理解ができる。

都城市の例では八景となる。『都城市及附近風光八景』(65)の場合は、昭和七（一九三二）年の『宮崎縣商工人名録』(66)に紹介されている「縣社神柱神社、小松原公園、一萬城、早水神社、縣社母智丘神社」の内、四か所を絵はがきに取り入れ、「早水神社境内の池、一万城遊園地、母智丘神社境内の櫻、關尾の瀧と甌穴、都城市神柱神社と九阜殿、摂護寺山門と釣鐘堂、都城市上町通、歩兵第二十三聯隊前の松並木」の八か所で構成している。

宮崎は先の『新撰宮崎十勝』からさらに風景が増えていき、繪画印刷製では『宮崎十六勝』に至る(67)。一ッ葉、皇宮屋、宮崎神宮、武徳殿、県青年修養道場、高等農林学校、橘通り、県庁、公会堂と図書館、橘橋、生目神社、天神山眺望、青島、青島の枇榔樹、鵜戸神宮、霧島の全十六枚中には、遊覧バスの案内イラストとかぶる

『宮崎十六勝』

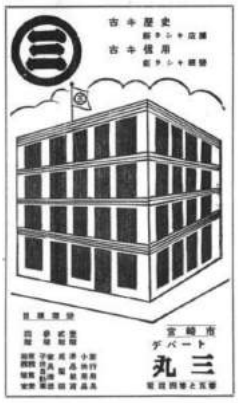
ところが十一枚と多い（傍線）。遊覧のモデルを考えると、「パンフ受領→遊覧バスで実見→下車後絵はがき購入」の順番となるだろう。ここには印刷物の役割分担がある。遊覧前に乗客の想像をふくらますのは、イラストの役目である。パンフの裏にも写真が単色印刷されているが、画像は絵はがきに劣る。遊覧中は現地を見ているのでよいのだが、一般にカメラが普及するまでの絵はがきは、思い出を画像として持ち帰るための役割を担うので、遊覧後に記憶に残る鮮明な画像が、絵はがきには要求される。

鮮明さという点から言えば、和歌山県の大正写真工芸所は、太田宏一氏によると「単に景勝地などの写真があれば売れるというわけではなく、そこには「鮮明さ」がなければならない。この点で工芸所の写真技術は優れていた」(68)という、高い写真印刷技術を持っていた。先の『宮崎十六勝』とは別の会社であるが、大正時代以降大阪、東京、高松、別府などに支店や営業所を開き、各地の絵はがきを製作し(69)、作られた絵はがきは、県庁、高等農林学校、公会堂と図書館、橘通りという同じ場所をいくつか撮影スポットに選んでいる(70)。

大正写真工芸所製作絵はがき

そのうちの一枚は橘通り一丁目の歳末風景で、北から南の方角を撮影しており、画面左が高島屋呉服店、右が神田本店である。この内高島屋呉服店は、広告にあるように三階建ての建築で、食堂を併設しており、宮崎に二つあるデパートの一つであった(71)。このようなデパートがあり、歩道と車道が分けられ舗装された橘通りは、実業の面で近代化が進む宮崎市の象徴であり、見る者に実感させるショーウィンドーとして通過したい場所であった。その街路を走る宮崎バスの車両が、絵はがきには写りこんでいる。この構図は、他県では市街電車が写りこむことが多い。その地方の主要な二次交通機関を、定点通過するときに写し込むのが、市街地の構図における絵はがきの手法、または約束事であったようだ。

昭和七年頃の橘通り（『宮崎名勝』）



高島屋呉服店と丸三デパート広告

維持管理された名所旧跡以外の、近代の建物や街並みについて、それぞれ別の会社が同じ場所を絵はがきにすることは、「舊宮崎町は縣廳設置以來の新開地で、其の以前は田圃であつたさうだが、今は宮崎市繁華の中心になつて居る。就中、橘通りは宮崎銀座ともいふべき近代的の市街だ。」と風景描写されたよ

うに(72)、置県以来変遷を経て、街の顔（ランドマーク）を作り、育てるまでに至ったことになる。大正五年の『宮崎線案内』に収められた、新市街でありながら、低い瓦屋根の街並みで、土の道路を馬車が走るという橘通りの写真と(73)絵はがきとを比べれば、街並みの違いがはっきりする。街の顔とは、その絵はがき(画像)を見たときに、すぐにどの街か見分けがつく場所、街の個性が表れた場所のことである(74)。遊覧バスを例にすれば、情報の送り手(遊覧バス側)と受け手(乗客)に、これらが街の顔であるという共通の認識が成立すれば、絵はがきは街の思い出や印象をくりかえし再生する装置となる。

大正五年当時の橘通り（『宮崎線案内』所収）

絵はがきになった宮崎の風景は、スポット自体が大きく変化しない神社などに比べて、近代の建築物や街並みの変遷が激しい。県庁以外の建物はほとんど壊され、かつての姿は写真や絵はがきの中に残されている。地域の履歴を復元する試みは、出版された『昭和絵巻　橘通から江平町』(75)にもある。東国原知事時代に始まった「県庁見学ツアー」に代表される県庁の観光地化は、新奇な着想というよりも、歴史的に見れば遊覧バス時代に先祖返りして、街の顔の一つとして再生復活させるものであった。

おわりに

絵はがきには歴史資料と画像資料の二つの顔があることがわかった。逓信省発行の絵はがきや県発行の紀念（記念）絵はがきは、周辺史（資）料と連携すれば、皇太子行啓などの歴史的な出来事を読み解くことができる。

個人発行の絵はがきや、名所旧跡の絵はがきは、中間の性質を持ち、画像資料としても貴重だが、歴史資料として発行の背景を考えることで、宮崎における絵はがきの需要や発達、観光分野への貢献といった問題を明らかにできる。当時の人々が何をもって「街の顔」としたかが名所旧跡の絵はがきには表れている。

画像資料としての絵はがきは、失われた風景を残す存在であるが、風景や事象には、写らなかったものもあることに注意したい。これが絵はがきの限界でもある。はじめに言及したように、そのままではいつ作られたかがはっきりしないなど、「いつ、どこで、だれが、なにを」という要素を確定しづらい性格を元来持っている。絵はがきは万能ではなく、それ単独で分かることは少ない。常に周辺史(資)料と連携して読み解く必要はここにある。

註

(1) 「日露役旅順開城」『〔明治神宮外苑聖徳記念絵画館壁画〕』（明治神宮奉賛會、便利堂、大正前期）絵はがきの作成年代は便宜上元号で記載する。

(2) 堀内敬三、井上武士編『日本唱歌集』岩波文庫、二〇一二年、一五四頁

(3) 『日英博覧會紀念』（逓信省、明治四十三年）、『東宮殿下御渡歐記念繪葉書』（大阪毎日新聞社神戸専属販売所、大正九年）、『英國皇太子殿下御来遊記念繪葉書』（朝陽會、大正十一年）、『大東亜戰争記念報國葉書』（逓信省、昭和十八年）。絵はがきデータ詳細は註（5）を参照。

（4）「知的情報としての映像」『博物館の世界』中公新書、一九八〇年、七八頁
（5）島田健造『日本記念絵葉書総図鑑』日本郵趣出版、二〇〇九年
（6）佐藤健二『風景の生産・風景の解放』講談社、一九九四年、二五頁
（7）生田誠『麗しき日本絵葉書　１００の世界』、日本郵趣出版、二〇〇九年
（8）学習院大学史料館編『絵葉書で読み解く大正時代』彩流社、二〇一二年
（9）展示図録『絵葉書　そのメディア性と記録性』和歌山大学紀州経済史文化史研究所、二〇一三年
（10）國學院大學研究開発推進機構学術資料センター『学術資料センター絵葉書資料目録』二〇一四年
（11）『宮崎県史　別編　民俗』宮崎県、一九九九年、九一七、九三一頁
（12）倉真一・長谷川司「「日向青島絵はがき」の成立と変容」『宮崎公立大学人文学部紀要　第十七号第一号』宮崎公立大学、二〇一〇年、同「宮崎の旅路はバスに乗って」『同　第二十一号第一号』宮崎公立大学、二〇一四年。
（13）ケネス・ルオフ、木村剛久訳『紀元二千六百年　消費と観光のナショナリズム』朝日新聞出版、二〇一〇年
（14）絵はがきの年代判定については、註（8）（9）（10）などの各文献を参照。
（15）郵政省編『郵政百年のあゆみ』小学館、一九七一年、八五、八六頁
（16）生方敏郎『明治大正見聞史』中公文庫、一九七八年、一七〇頁
（17）『日本記念絵葉書総図鑑』
（18）『戦役紀念絵葉書第三回』『同第四回』（逓信省、明治三十八年）。データは註（5）参照。
（19）『郵政百年のあゆみ』、八八頁
（20）樋畑雪湖『日本繪葉書史潮』日本郵券倶楽部、一九三六年（復刻版、岩崎美術社、一九八三年）、一〇〇頁
（21）『日州』明治四十年八月二十八日付広告
（22）『宮崎縣行啓誌』（宮崎縣、一九一二年）八六、八七頁、「繪葉書ノ發行」
（23）「自序に代へて」『日本繪葉書史潮』。樋畑は郵便切手などの研究でも知られ、海外からの旅行者向けの叢書にも、著書が参考書として挙げられている（『JAPANESE　POSTAGE　STAMPS』國際觀光協會、一九四〇年、一四七頁）。
（24）関根正直、加藤貞次郎『改訂有職故實辞典』（村田書店、一九九〇年）「きあかのきぬ」（二一七頁）の項目参照。
（25）原武史『大正天皇』朝日新聞社、二〇〇〇年、一二六頁
（26）『大正天皇』一四七、一四八頁
（27）『東宮殿下大分縣行啓記念』（もとゑ商会、明治四十年）。製造元は東京日本橋区数寄屋町所在。上部に金の鳳凰を配置し、エンボス加工を施す。
（28）若山甲蔵『宮崎縣案内記』一九〇七年
（29）鉄道院『鉄道院線沿道遊覧地案内』鉄道院、一九一〇年、廻遊旅行の栞二頁（山本亮介編『コレクション・モダン都市文化　第６１巻　旅行・鉄道・ホテル』ゆまに書房、二〇一〇年所収）
（30）『宮崎線案内』九州鐵道管理局、一九一六年
（31）『宮崎縣案内』宮崎縣、一九一六年
（32）三島信太郎『宮崎名所』三島天眞館、一九一六年
（33）『宮崎名所』「はしりがきの―はしがき」
（34）『日州』明治四十年十月二十一日付広告
（35）川崎源太郎『日隅薩商工便覧』竜泉堂、一八九〇年、三四丁
（36）『宮崎名所』一一頁。原文でのルビは、「泉亭」（いずみてい）、「紫明館」（しめいくわん）、「水光館」（すいこうくわん）となる。
（37）宮崎商工協會編輯『みやさき』宮崎商工協會假事務所、一九一九年
（38）『日向』三島天眞館、大正七年頃、宮崎神宮櫻馬場
（39）『泉亭』植村写真館、大正六年頃
（40）『宮崎縣大觀』宮崎縣大觀編纂部、一九一五年、一七六頁
（41）『宮崎縣大觀』一七八頁
（42）『みやさき』神田橋旅館、泉亭広告
（43）『宮崎縣寫眞帖』（宮崎縣、一九一六年）「大淀川」
（44）『都城歩兵第六十四聯隊正門ノ景』都城上町海江田書店、大正七年以前

(45) 『小林名所軍馬ノ櫻繪はがき』（土橋寫眞舘、昭和初期）、『小林町名所繪葉書軍馬の櫻』（格〔柊〕山寫眞舘、昭和初期）。県の写真帖では、大正五年に歩兵第六十四連隊、昭和五年に軍馬の桜が紹介される。
(46) 『宮崎縣行啓誌』宮崎縣、一九二二年、二一二頁
(47) 『宮崎縣行啓誌』図版参照。
(48) 鐵道省『鐵道旅行案内』博文館、一九二四年、二〇九頁
(49) 田山花袋『温泉めぐり』岩波文庫、二〇〇七年、三五五頁
(50) 『鐵道旅行案内』二〇九頁
(51) 『名所案内』門司鐵道局運輸課、一九二九年、二〇二頁
(52) 松田法子『絵はがきの別府』左右社、二〇一二年、二八七～二九一頁
(53) 宮崎交通社史編纂委員会『宮崎交通７０年史』宮崎交通株式会社、一九九八年、二四～二八頁
(54) 『宮崎名勝遊覧バス案内』宮崎バス株式會社、一九三三年
(55) 『宮崎縣案内記』九五~一〇二頁
(56) 『宮崎縣大觀』七～一一頁
(57) 『宮崎名所』一～二六頁
(58) 『宮崎縣史蹟調査　第一輯　宮崎市宮崎郡之部』宮崎縣、一九二七年、六頁
(59) 『宮崎縣史蹟調査　第一輯　宮崎市宮崎郡之部』一四頁
(60) 「自然の美　人工の美　人情の美」『自然の美　人工の美　人情の美』鉱脈社、一九八九年、一一八頁
(61) 「自然の美　人工の美　人情の美」『自然の美　人工の美　人情の美』一二一頁
(62) 「的を絞る」『一木一草』講談社、一九八〇年、二四一～二四二頁
(63) 『生目神社』（大正～昭和初期）、『南洋の風土を偲ぶ日向青島の勝景』（昭和初期）
(64) 「植村の繪ハガキ」『蔵六随筆集』宮崎縣政評論社、一九二六年、六一一頁
(65) 『都城市及附近風光八景』前田町西川絵葉書店、昭和八年頃
(66) 『宮崎縣商工人名録』宮崎商工會議所、一九三二年
(67) 『宮崎十六勝』繪画印刷、昭和七年頃
(68) 太田宏一「大正写真工芸所の歴史」『絵葉書　そのメディア性と記録性』二一頁
(69) 「大正写真工芸所の歴史」『絵葉書　そのメディア性と記録性』二〇頁
(70) 『宮崎名勝』大正写真工芸所、昭和七年頃
(71) 『宮崎縣商工人名録』広告。一方の丸三デパートは、旭通一丁目に所在し、熊原呉服店の経営であったが（『宮崎縣商工人名録』一六一頁）、昭和十一年に鹿児島の山形屋呉服店が買収し、同年宮崎支店として開業した（『山形屋二百十七年 - 会社設立五十周年記念 -』山形屋、一九六八年、二四七～二四九頁）。
(72) 國府犀東、大佛次郎、田中純、石井柏亭『神國日向』九州風景協會、一九三四年、一五六頁
(73) 『宮崎線案内』
(74) 宮崎で、テレビの天気カメラや街頭インタビューの冒頭カットに、橘橋周辺や橘通りが使われるのは、映像の送り手と受け手に、これらが街の顔であるという共通の認識が成立しているからである。
(75) 黒木朝子、いちいち会編『昭和絵巻　橘通から江平町』鉱脈社、二〇〇八年